

<低学年模試の結果報告>

看護師国家試験の低学年模試は、科目別実力テストの解剖生理学と病態生理学を 81 名が受験した。国家試験には必修問題と一般問題があり、必修問題では 80%以上の得点率が求められる。

解剖生理学の総合成績は、平均正答率 41.9%で平均偏差値 46.4 であった。全国平均と比較すると、平均正答率は 4.7%低く、平均偏差値は 3.6 低かった。また必修問題と一般問題では、必修問題の得点率が高い。これは必修問題が基礎的な問題、一般問題が応用問題であるため、2 年次では基礎的な学習を終了した直後であることを反映していると考えられる。領域別では、細胞と組織・生体リズムと内部環境の恒常性・代謝系・体温調節・生殖器系・成長と老化の正答率は全国平均を上回っている。それに対して、神経系・循環器系・内分泌系の得点は全国平均より 10 ポイント以上低い。この 3 領域は、学習内容が複雑で高度であるため、特に再学習を促すことが必要である。

病態生理学の総合成績は、平均正答率 54.6%で平均偏差値 45.7 であった。全国平均と比較すると、平均正答率は 8.1%低く、平均偏差値は 4.3 低かった。また必修問題と一般問題では、やはり必修問題の得点率が高い。これは解剖生理学と同様の傾向と言える。領域別では、生殖機能が全国平均より正答率が高かった。健康の維持増進・栄養・造血・免疫・神経系の正答率が低かった。これは、解剖生理の習熟度とも関連していると考えられる。個人成績の総合判定では、解剖生理学が A・病態生理学が B という学生が 2 名いた。

今回は 2 年次終了時点で、看護学の基礎となる 2 科目の受験であり、正に中間評価であった。

必修科目の正答率が高い傾向はあるが、必修判定をクリアし総合得点を上げるためには、学年全体として、今後の着実な努力が必要であることが明らかになった。

表 1 総合成績

			必修問題	一般問題	総合計
解剖生理学	校内	平均点	5.5	32.3	37.8
		平均正答率 (%)	54.7	40.4	41.9
		平均偏差値	47.3	46.5	46.4
	全国	順位(校)	244/334	253/334	253/334
		平均点	6.0	36.0	41.9
		平均正答率(%)	59.7	44.9	46.6
	平均偏差値	50.0	50.0	50.0	
病態生理学	校内	平均点	5.5	33.4	38.9
		平均正答率 (%)	54.6	41.8	43.2
		平均偏差値	45.7	43.8	43.8
	全国	順位(校)	187/226	197/226	197/226
		平均点	6.3	40.0	46.3
		平均正答率(%)	62.7	50.0	51.4
	平均偏差値	50.0	50.0	50.0	